

國學院大學學術情報リポジトリ

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクト内、ワーキンググループ活動報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 星野, 靖二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001759

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」 プロジェクト内、ワーキンググループ活動報告

星野靖二

以下、「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクト内に設けられたワーキンググループでの活動について報告する。なお、下記概要に記したように本ワーキンググループが組織されたのは平成19(2007)年度末であるため、報告する活動の期間は平成20(2008)年度前半までを含めることとする。

1. 本ワーキンググループの概要

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」のプロジェクト活動紹介において述べられているように、研究開発推進機構の各プロジェクトのデジタル化を統合的に推進する一環として、各プロジェクトで運用中あるいは構築中の諸データベースを統一的なシステムにおいて管理・公開することが検討されており、平成20年度中に統合的なデータベース管理・公開ソフトウェアを採用する方向で議論が行われてきた。

既に同プロジェクト企画委員会では、平成19年度中から富士通のミュージズテーク(Musetheque)というソフトウェアを一つの有力な候補として検討が行われてきており、平成20年度になって同ソフトウェアの採用が正式に承認された。これに関連して本ワーキンググループは、諸データベース間のデータの整合や、あるいはソフトウェアの移行に伴う技術的な問題を含めたより具体的な問題について協議するために、平成19年度第6回企画会議(平成19年11月21日開催)においてその組織が諮られ、平成19年12月6日に発足して第1回ワーキンググループ会議を行っている。

なお、平成19年度におけるワーキンググループのメンバーは以下の通りである(井上順孝、市川収、加瀬直弥、加藤里美、中村耕作、平藤喜久子、星野靖二、星野光樹、村瀬友洋、安達匠、及川聡、後藤幸雄、斉藤崇樹、堀内弘行)。また平成20年度におけるメンバーは以下の通りである(井上順孝、市川収、加瀬直弥、平藤喜久子、星野靖二、星野光樹、松本久史、中村耕作、安達匠、及川聡、後藤幸雄、斉藤崇樹、堀内弘行)。

なお、現在の段階でミュージズテークへの移行が予定されているデータベースについては以下の通りである(「学術資料データベース」全9データベース[「大場磐雄博士写真資料」・「大場磐雄博士資料」・「柴田常恵写真資料」・「折口信夫博士歌舞伎絵葉書資料」・「宮地直一博士写真資料」・「杉山林継博士収蔵資料」・「考古学資料館所蔵縄文土器」・「原田敏明毎文社文庫写真資料」・「考古学資料館発掘調査報告書」]、「神道・神社史料データベース」、「国学関連人物データベース」、「図書館デジタルライブラリ」、「Encyclopedia of Shinto(EOS)」、「Basic Terms of Shinto」、「神字語彙」)。

また、これら以外にも今後データベースを追加していくことが想定されており、特に小規模なデータベースについては、後述するように管理者側での追加を可能にする機能の開発・実装を要望している。

2. 本ワーキンググループの目的

本ワーキンググループの目的とするところは、上述したように統一的なソフトウェア導

入にまつわる実務的・技術的な面までを含めた諸事項について協議を行うということであるが、より具体的には大きく分けて以下の二つの問題群について取り組んできた。

2-1. 諸データベース間の整合についての協議

第一に、既に存在する諸データベース間における共通性について協議を行った。これはすなわち、ミュージック導入に先行して既に稼働している、あるいは既に構築作業が行われている諸データベースについて、それぞれのデータ内容などについてどのように整合を取るかということについて調整し、今後追加されるデータベースが準拠すべき形式と書式について検討するというものである。

統一的なシステムを採用する重要な利点の一つは、諸データベース間の横断検索が可能になるという点にあるが、これを実現するためには同じ言葉が基本的に同じ表記において記述されている必要があり、ここで表記の統一という問題が生じる。また全てのデータに対して検索を実行する全文検索とは別に、特定のデータ項目を指定して横断検索を行う場合には、共通の項目を選定し、その書式を統一するという作業を前もって行っておく必要がある。本ワーキンググループではこうした問題について議論した。

2-1-1. 共通検索項目の設定

まず共通に設定すべき検索項目とその書式について検討した。作業の手順としては、既に諸データベースで設定されている諸項目を一覧にして比較し、続いてその中から必要と思われる項目を選定し、更に一部の項目については新規に設定することとした。現在、読みがなデータの項目を含む30項目程がリストアップされている。なお、読みがなについてはローマ字表記を採用することになったが、この表記にまつわる問題については次節で触れる。

より具体的な問題としては、例えば時代表

記の問題が議論された。まず西暦表記と和暦表記との間のデータ互換の問題が取り上げられ、これについて諸データベースに共通する変換表を設定することで対応可能であることが確認された。また任意の1年と鎌倉時代・江戸時代のような「時代」データとの間の対応について議論が行われ、年と時代の変換表を作成することと、それを開発・実装予定である「時代」項目検索機能に組み込む方向性が確認された。

2-1-2. ローマ字表記の問題

これは共通検索項目の設定にも関連した問題であるが、平易に検索を行うことができる「読みがな」という検索項目を設定することが決定され、そしてこれをローマ字によって表記するという統一方針が確認された。これは、既に運用されているEOSにローマ字表記のデータが蓄積されていることに加えて、ローマ字表記を採用することによって非日本語圏からの利用を見込み、より広く活用してもらうためである。

しかし、総論としては採用が決定されたこのローマ字表記に関して、実際にどのようにアルファベットにおいて表記するかという点において問題が生じた。当初ヘボン式を採用すべきではないかという意見が出されたが、これに対してヘボン式表記が必ずしも直感的なものではないこと(例えば「難波」が「Nanba」ではなく「Namba」となる)⁽¹⁾、またヘボン式を採用したとしても長音などの表記の揺れが解消できないこと⁽²⁾などが指摘された(例えば「オオノ」も「オノ」もヘボン式だと「Ono」になるが、ヘボン式を基本とするパスポート申請用の表記では「オオノ」について例外的に「Ohno」を用いることが認められるようになっている。かつ昭和29年に出された内閣告示第一号には「大文字の場合は母音字を並べてもよい」とあり、これに依ると「オオノ」について「Oono」表記が可能になる)。

これに関して、ミュージックを運用している富士通の技術者に尋ねたところ、他の運用例を見てもローマ字表記に関して必ずしも統一的なルールがあるわけではないという回答があり、また図書館で用いられている書誌情報においても定められた表記規則があるわけではないということが確認された。

一方、本デジタル・ミュージアムに収録される諸データベースは主に日本語のコンテンツを持つものであり、EOSなどを考慮したとしても、基本的に使用者はある程度の日本語能力を持つであろうことが指摘された。

これらを勘案して、結論としては読みがなをそのままアルファベットで音写する形式が採用されることとなったが(例:「難波」は「Nanba」、「オオノ」は「Oono」となる)、凡例においてこの方針を説明することが必要であることが指摘された。また、結局ローマ字表記の揺れを自動的に補正することは困難であるため、複数の検索語において検索される蓋然性が高い項目については、データを複数保持することで対応する方向性が確認された(例:「縄文土器」について「jomon doki」「johmon doki」など。また、またEOSのように使用者が英語でアクセスして英語で検索するという蓋然性が高いところは、ヘボン式の表記を併記する)。

2-2. ミュージック導入にあたっての技術面での諸要望の調整

第二に、実際の運用を念頭に置いて、より具体的な問題について検討した。もともとミュージックは博物館・美術館などの収蔵品管理を主眼として開発されたソフトウェアであり、本プロジェクト、あるいは諸データベースにおいて構想している機能の幾つかについては、新規に開発・実装する必要があることになる。そのため本ワーキンググループにおいて管理・公開についての意見を取りまとめ、富士通側の技術者と調整を行った。

2-2-1. 作り込みによって実装が予定されている案件

以下、本ワーキンググループに集約された要望と摺り合わせる形で、新規に開発・実装が予定されている機能の一部を紹介する。これは例えば、上述した「時代」検索機能なども含まれる。

まず、公開後に管理者側においてデータ項目の追加・修正・削除が可能になる機能を要望し、これについて「簡易設定変更機能」の開発・実装が予定されている。これによって使用者の要望に即した変更も可能なより柔軟性の高い運用が可能になるものと思われる。

また、現行EOSで行われているように、検索結果の表示画面において検索に用いた文字列がハイライトされた状態で表示されることを希望し、これについても開発・実装が予定されている。これによって検索結果表示画面のわかりやすさが向上するものと思われる。

加えて、諸データベースの持つ性格の違いから、例えば写真を大きく見せたい、複数の写真を見せたい、あるいは文字情報を中心的に見せたいといった公開画面についての異なる希望が出された。これに関して、幾つかの公開画面のレイアウトを前もって設定し、資料毎に表示レイアウトを選択できる機能を開発・実装予定である。具体的なレイアウト案については更に議論を深める必要があるが、これもまた諸データベースの使いやすさを向上させるものと思われる。

2-2-2. 提示されたオプション案とそれに対する検討

また、本ワーキンググループでは、ミュージックのシステム面での作り込みとは別に、詳細は省略するが富士通側からミュージックと関係可能な幾つかのオプションについてプレゼンテーションを受け、それらの採否について検討した。

平成20年度においては画像に「電子透か

し」を組み込むソフトウェアの導入が決定され、これによって諸データベースで用いられている画像に統一的な規格の電子透かしを組み込むことが可能になる。また平成20年度の採用は見送られたが、Google Maps と連係する地図情報システム (GIS) について、来年度以降引き続き検討していくという方針が確認された。

2-2-3. 現在検討中の案件

現在開発・実装の検討を依頼している最も大きな案件として、小規模なデータベースを管理者側で新規に追加する機能がある。これは、例えば科学研究費補助金等の外部資金等によって作成されたデータベースを、本デジタル・ミュージアム上で公開することができるようにするためである。この機能の実装に

よって、本デジタル・ミュージアムがより魅力あるデータベース群となっていくように思われる。

3. 今後の課題

平成20年度の後半は、本デジタル・ミュージアムの実稼働に向けてより具体的な内容について検討していく必要がある。そのため本ワーキンググループは、デジタル・ミュージアムプロジェクト企画委員会本体と、そして実際にデータベースを作成している諸プロジェクトと緊密に関係を取りながら、本デジタル・ミュージアムをより内容の充実した、かつ使いやすいものとするべく協議を進めたい。

注

- (1) ヘボン式の表記規則では、(a) B・M・Pの前にNではなくMをおく [(例) 難波 (なんば) NAMBA 本間 (ほんま) HOMMA 三瓶 (さんぺい) SAMPEI]、(b) 子音を重ねて示すが [(例) HATTORI 服部 (はっとり) KIKKAWA 吉川 (きっかわ)], ただしチ (CHI)、チャ (CHA)、チュ (CHU)、チョ (CHO) 音に限り、その前にTを加える [(例) HOTCHI 発地 (ほっち) HATCHO 八町 (はっちょう)] といったことなどが定められている。
- (2) なお、本来ヘボン式には長音記号が存在しないが、現行 EOS では長音を長音記号によって表示している (例: 修験道を Shugendo ではなく Shugendō として表記)。入力の煩雑さを勘案して、新規に読みがなデータとして入力するものに長音記号は採用しないことになったが、検索の際には長音記号のないデータでもヒットするため、現行の EOS の長音記号についてはそのまま変更する必要がないことが確認されている (例: データとしては Shugendō として入力されていても、Shugendo という検索語でヒットする)。